

瀬戸内町出土の完形品カムイヤキ

鼎 丈太郎

一、はじめに

2007年2月、伊仙町カムイキヤキ古窯跡群が国指定史跡に指定された。1983年の発見より20数年を経ての指定であり、奄美諸島での国指定史跡は、宇宿貝塚に次いで2例目となる。

徳之島カムイヤキ古窯跡群は、徳之島の伊仙町阿三において、ため池工事中に発見された。発見地の地名が亀焼（カムイヤキ）であったため、カムイヤキ古窯跡群と命名された。平安時代の終わりから鎌倉時代にかけての無釉陶器窯であるが、その成立過程や生産者、生産技術など未だ解明できていない部分が多い。その為、中世段階の南西諸島を解き明かす上で重要な遺跡であり、国指定史跡に指定されたのも当然の結果である。

遺物であるカムイヤキは、南九州の一部から先島諸島まで約千キロという広大な範囲で流通しており、初めて南西諸島全域に流通した遺物である。消費地での発見はカムイヤキ古窯跡群の発見より古く、名称も「類須恵器」や「南島の須恵器」など様々な名称が使用されていた。今までは、カムイヤキ古窯跡群の他にも生産地が存在する可能性があったため「類須恵器」という名称を使用していたが、最近の調査結果によると生産地であるカムイヤキ古窯跡群と、消費地である各遺跡のカムイヤキの胎土が同じであることが判明したため、本稿では「カムイヤキ」という名称を使用することにしたい。

カムイヤキの器種は、壺・鉢・碗・盤・甕・水差しがあり、大きさも様々である。消費地である南西諸島の遺跡では、玉縁口縁白磁や滑石などと共に破片として出土することが多いが、ごく稀にほぼ完形品で出土する事例がある。完形品のカムイヤキの出土地域は、喜界島、奄美大島の東側、徳之島に集中している。カムイヤキの分布範囲が南西諸島全域であるにも関わらず、完形品の出土地は奄美諸島の中でも北部に限られており、器形についても、器高が10~15センチ程度の壺しか確認されていない。



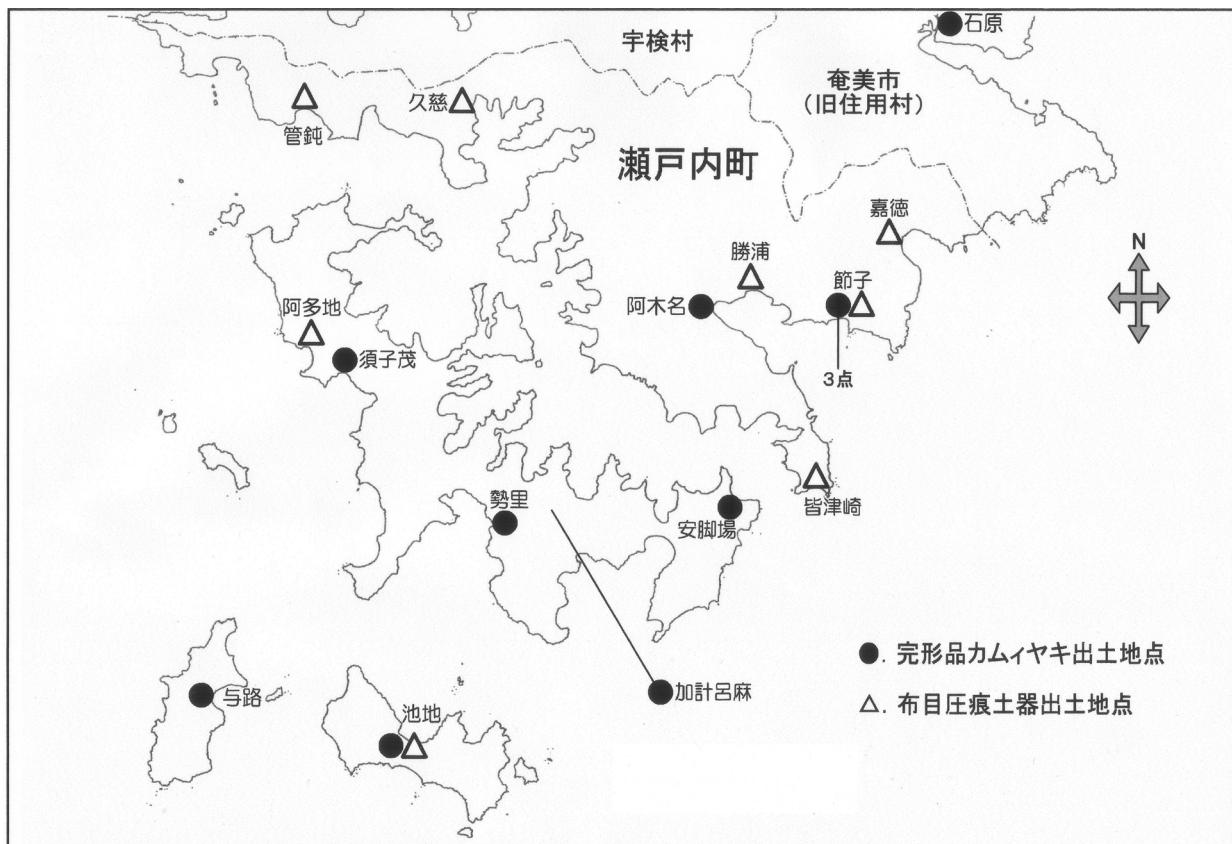
第1図 カムイヤキ流通範囲と完形品カムイヤキ集中出土地域

瀬戸内町においても完形品のカムィヤキが数点確認されており、2005年に発行した『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』において紹介を行った。その後の調査において、加計呂麻島勢里集落にて新たに1点の完形品カムィヤキを確認した。そこで、瀬戸内町出土の完形品カムィヤキをもう一度整理し紹介を行いたい。

二、瀬戸内町出土の完形品カムィヤキ

瀬戸内町出土の完形品カムィヤキは、2007年3月現在で10点確認されている。その内の4点は瀬戸内町立郷土館において保管されている。その他の所在は、3点が個人蔵、1点が奄美市立歴史民俗資料館蔵、1点が奄美市立奄美博物館蔵、そして残りの1点は現在所在不明である。池田榮史氏の『南島出土類須恵器の出自と分布に関する研究』によると「奄美群島には約30例の資料があり、これらについては、基本的に伝世品として扱われている。」とされており、完形品カムィヤキの総数からみても瀬戸内町出土の完形品カムィヤキの数は、決して少なくないことが理解できる。

瀬戸内町域における完形品カムィヤキの出土状況を確認してみると、奄美大島では、節子集落で3点、阿木名集落で1点の計4点。加計呂麻島では、安脚場集落で1点、須子茂集落で1点、今回新たに確認できた勢里集落で1点、出土集落は不明だが加計呂麻島出土品が1点の計4点。請島では池地集落で1点。与路島では与路集落で1点確認されている。



第2図 瀬戸内町における完形品カムィヤキ出土分布図

第2回瀬戸内町における完形品カムイヤキ出土分布図を見てみると、瀬戸内町の有人島4島すべてにおいて完形品カムイヤキが確認されていることがわかる。また、奄美大島では、東側(特に伊須湾)に集中しており、加計呂麻島では外洋側に多いことがわかる。

それでは、瀬戸内町で出土した完形品カムイヤキを、個々に紹介を行いたい。

(1) 節子集落出土品① (写真1)

節子集落の畑において、耕作中に出土したカムイヤキである。口縁部と底部の一部を欠損しているが、ほぼ完形品である。焼成は良好で、残存高13.5センチ、頸部径9.0センチ、胴部最大径20.2センチ、底径12.2センチの小壺である。頸部から胴部最大部にかけて、7条(一部分8条)の渦巻状波状文が施されている。底部穿孔は3.5×1.5センチ程度である。瀬戸内町に寄贈され、瀬戸内町立郷土館にて保管・展示されている。

(2) 節子集落出土品② (写真2)

節子集落節子川の西側畑において出土した完形のカムイヤキである。焼成は良好で、器高11.8センチ、口径10.3センチ、頸部径8.4センチ、胴部最大径16.0センチ、底径9.0センチの小壺である。頸部から胴部最大部にかけて、渦巻状の波状文と横沈線文を交互に施してある。文様は頸部から、渦巻状波状文(2条)→横沈線文(1条)→渦巻状波状文(2条)→横沈線文(1条)→渦巻状波状文(1条)の順番で施されている。頸部には約4.0ミリの穿孔が二箇所ある。穿孔の状態から焼成前の穿孔であると考えられる。

(3) 節子集落出土品③ (写真3)

節子集落節子川に合流する小川において発見されたカムイヤキである。発見の位置や状態から、節子集落出土品②とほぼ同じ地点で埋蔵されていたと考えられる。口縁部の一部を欠損(所有者が接合)しているが、ほぼ完形品である。焼成は良好で、器高11.6センチ、口径8.0センチ、頸部径7.5センチ、胴部最大径14.5センチ、底径8.5センチの小壺である。文様は頸部から胴部最大部にかけて、5条の輪状波状文が施されている。頸部には、約4.0ミリの穿孔が二箇所ある。穿孔の状態から焼成後の穿孔であると考えられる。

(4) 安脚場集落出土品 (写真4)

安脚場集落出土品と伝わるカムイヤキであるが、出土地点及び出土状況は不明である。口縁部を欠損しているが、ほぼ完形品である。全体的に赤茶色の色調を呈しており、焼成は悪く、無数の亀裂がある。残存高15.6センチ、頸部径8.5センチ、胴部最大径21.0センチ、底径11.0センチの小壺である。文様は頸部から胴部最大部にかけて、6条の渦巻状波状文が施されている。瀬戸内町に寄贈され、瀬戸内町立郷土館にて保管・展示されている。

(5) 須子茂集落伝世品 (写真5)

須子茂集落の有力者宅に伝わる伝世品のカムイヤキであるが、出土地点及び出土状況は不明である。焼成良好な完形品であり、器高11.1センチ、口径10.3センチ、頸部径9.5センチ、胴部最大径15.5センチ、底径9.5センチの小壺である。文様は施されていないが、ヘラ記号らしき「ノ」「人」がヘラ書きされている。瀬戸内町に寄贈され、瀬戸内町立郷土館にて保管・展示されている。

(6) 勢里集落出土品（写真6）

今回、新たに確認したカムィヤキである。発見者によると、勢里集落のほぼ中央の砂地から焼けた骨（人骨かどうかは不明）と共に出土したことである。口縁部を一部欠損しているが、ほぼ完形品である。焼成は良好で、器高 13.0 センチ。口径 8.5 センチ、頸部径 6.9 センチ、胴部最大径 15.0 センチ、底径 9.5 センチの小壺である。頸部から胴部最大部にかけて、5 条の輪状波状文が施されている。胴部下部にヘラ記号のようなものがあるが、彫り込みは浅い。

(7) 池地集落出土品（写真7）

池地集落の水道工事中に出土したカムィヤキである。補修跡があるがほぼ完形品であり、器形はやや不定形である。焼成は良好で、器高 15.8 センチ、口径 12.0 センチ、頸部径 9.8 センチ、胴部最大径 20.0 センチ、底径 12.0 センチの小壺である。文様は施されていないが、胴部最大部に穿孔跡がありコンクリートのようなもので補修されている。補修跡は、2.0～3.0 センチ程度である。瀬戸内町に寄贈され、瀬戸内町立郷土館にて保管・展示されている。

(8) 阿木名集落出土品（第4図、写真8）

阿木名集落出土品と伝わるカムィヤキであるが、出土地点及び出土状況は不明である。胴部を欠損しているが、ほぼ完形品の小壺である。『南日本文化6』『考古資料大観 12』『カムィヤキ古窯跡群シンポジウム』によると、器高 16.3 センチであり、頸部から胴部最大部にかけて、輪状波状文と横沈線文を交互に施してある。文様は頸部から、横沈線文（1条）→輪状波状文（3条）→横沈線文（1条）→無施文部分→横沈線文（1条）→輪状波状文（3条）→横沈線文（1条）の順番で施されており、手の込んだ文様構成になっている。焼成は良好であるが、胴部を 1/6 ほど欠損している。奄美市（旧名瀬市）に寄託され、奄美市立奄美博物館にて保管されている。

(9) 加計呂麻島出土品（第6図、写真9）

『奄美群島遺跡分布調査報告書II』によると、加計呂麻島出土品と報告されているカムィヤキである。ただし、里山勇廣氏の「奄美諸島・古代概観」では、同一個体と考えられるカムィヤキが、奄美市小湊出土と報告されている。出土地点は不明であり今後の調査が必要であるが、亀井明徳氏の「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」では、小湊出土資料は別の資料である。ここでは、年代の新しい鹿児島県教育委員会の報告を優先して、加計呂麻島出土品として扱うこととする。

口縁部を欠損しているが、ほぼ完形品である。『赤木名グスク遺跡』所収の実測図から計測すると、残存高 7.0 センチ、頸部径 7.0 センチ、胴部最大径 11.8 センチ、底径 6.4 センチの小壺である。頸部から胴部最大部にかけて、5 条の渦巻状波状文が施されている。また、底部に「天」というヘラ描きが施されており、注目されている。奄美市立歴史民俗資料館（旧笠利町）にて保管されている。

(10) 与路島出土品（第5図）

与路集落において、個人宅の水道工事中に発見されたカムィヤキである。『南日本文化6』によると「水道工事のために表土を 30 センチ除き、更に 30 センチほど掘って南に頭を向けた仰臥伸展位の人骨に遭遇。胸に当品と石器らしきものを抱えこんでいたが、石器は目下所在不明で、人骨は発見者の処理にまかせた」という調査報告がなされている。報告図面を見てみると、無文の完形品小壺であることが確認できる。

また、瀬戸内町立郷土館学芸員である町健次郎氏の聞き取り調査によると、「与路のカミミチ付近の住宅から人骨と共に出土したと伝えられる資料である。発見者は、当時千葉大学にいた大山麟五郎氏と熊本大学の白木原和美氏に鑑定を依頼し、カムィヤキであることと口縁部が欠損しているのは呪術のためであるということを教示された。その後カムィヤキは、与路小中学校の資料室に保管された。」との聞き取りを収集されている。しかし、現在の与路小中学校資料室において完形品カムィヤキらしき資料は見当たらず、現在所在は不明である。

以上、瀬戸内町出土の完形品カムィヤキを概観してみると、器高 10~15 センチ程度の小壺で文様やヘラ描きを施したものが多く、現在までに報告されている他地区の完形品カムィヤキと、同じ特徴を持つものであることが確認できた。

三、確認されている完形品カムィヤキ

瀬戸内町出土の完形品カムィヤキを前節において紹介したが、今節ではその他に確認されている完形品カムィヤキを、旧市町村域で地区割りし、報告書などを参考に概観してみたい。

(1) 奄美市笠利地区

宇宿貝塚出土品（写真 10）

宇宿貝塚で出土したカムィヤキである。乳児の人骨と共に、細かく割れた状態で出土している。完形品カムィヤキを復元した写真を見ると、無文でほぼ完形品の小壺であったことが確認できる。また、宇宿貝塚では、焼骨が納められた陶質土器（10世紀頃）が発見されている。

万屋城遺跡出土品（第7図、写真 11）

万屋集落において重機による掘削中に出土したもので、口縁部を欠いているがほぼ完形品である。報告書によると「口縁部及び底部に比して肩が張る壺で、頸部径 6.8 センチ、胴部最大径 16.7 センチ、底部最大径 9.0 センチを測り、頭部から肩部にかけてはほぼ平らとなり、2 条の籠描沈線をはさんで、5 条の波状の籠描沈線が施文されている。胎土は暗灰色、外面は淡灰色を呈する。」と報告されており、有文の小壺であることがわかる。

笠利地区では、完形品カムィヤキが 2 点確認されている。2 点とも遺跡からの出土であり、人骨を伴っている。2 点とも笠利半島の東側での出土である。

(2) 龍郷地区

円集落出土品（第8図）

『南日本文化 6』によると、円集落の個人宅庭を造成中に出土したカムィヤキで、破碎がひどく細片を接合してあり胴部の約 1/3 と口縁部を欠損している、と報告されている。実測図で確認する限りでは、無文の小壺である。

龍郷町出土品（写真 12）

『カムィヤキ古窯跡群シンポジウム』によると、龍郷町出土品と伝承されている完形品のカムィヤキである。器高 17.0 センチの小壺であり、胴部最大部付近に「天」若しくは「夫」とヘラ描きが施さ

れている。このヘラ描きは、ヘラ記号なのか文字なのか不明であるが、加計呂麻島出土品と伝承される完形品カムィヤキの底部に残るヘラ描きも「天」であり興味深い。

龍郷地区では、完形品カムィヤキが2点確認されている。龍郷地区では、完形品カムィヤキの他に、龍郷町戸口ヒラキ山出土と伝承される須恵器が、龍郷町立公民館に保管・展示されている。

(3) 名瀬地区

名瀬小学校出土品（第9図、写真13）

奄美市名瀬の名瀬小学校出土品と伝承されているカムィヤキである。口縁部分を一部欠損しているが、ほぼ完形品の小壺である。器高は9.7センチであり、文様は頸部から胴部最大部にかけて、7～8条の渦巻状波状文が施されている。

小湊集落出土品（写真14）

亀井明徳氏の「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」によると、奄美市名瀬小湊において、水道工事中に完形品の陶磁器が10点出土したという。出土品の内容は、白磁皿1点、白磁碗3点、黒釉碗1点、褐釉四耳壺4点（内1点は未調査）、そして残りの1点が完形品カムィヤキである。生産年代は11世紀後半から12世紀中葉と報告されており、発見者によると一部の壺の中に人骨が納められていたという。亀井氏は、碗・皿の数と壺の数が同数である事や一部の壺に人骨が納められていた点から、出土陶磁器は蔵骨器として使用され、蓋と身のセットであった可能性が強い、と指摘している。写真で確認する限りでは、小湊集落で出土した完形品カムィヤキは、無文の小壺である。

名瀬地区では、完形品カムィヤキが2点確認されている。

(4) 住用地区

城集落出土品（写真15、写真16）

奄美市住用城集落において出土したカムィヤキである。城集落出土の完形品カムィヤキは2点確認されており、どちらも無文の完形品小壺である。奄美市立歴史民俗資料館の中山清美氏によると、出土地点は現在の城集落の墓地付近であり、完形品カムィヤキの他に遺物は確認できなかったという。

川内集落出土品（第10図、写真17）

奄美市住用川内集落において出土したカムィヤキであるが、出土地点及び出土状況は不明である。川内集落出土の完形品カムィヤキは1点確認されており、奄美市立奄美博物館に保管されている。口縁部分を一部欠損しているがほぼ完形品の小壺で、文様は頸部から胴部最大部にかけて、5～6条の渦巻状波状文を施してある。底部に粗痕があるのが特徴である。

石原集落出土品（第11図、写真18・19）

奄美市住用石原集落において出土したカムィヤキであるが、出土地点及び出土状況は、不明である。石原集落出土の完形品カムィヤキは2点確認されており、1点は、『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II』において報告されている資料で、口縁部分が窄まったカムィヤキでは特異な器形をしている。写真で確認する限りでは、無文の完形品小壺である。

もう1点は、奄美市立奄美博物館に保管されており、胴部が丸みを帯びている完形品カムィヤキである。口縁部分を一部欠損しているが、ほぼ完形品の小壺で文様は施されていない。

住用地区では、完形品カムィヤキが5点確認されている。

(5) 喜界地区

志戸桶七城出土品（第 12・13・14・15・16、写真 20・21・22・23・24）

志戸桶集落七城において出土したカムィヤキである。『南日本文化 6』『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅲ』において報告されている資料で、七城出土のカムィヤキは 5 点であり、完形品の石鍋が 1 点共伴している。5 点のうち 1 点が無文であり、その他のカムィヤキは文様が施されている。5 点のカムィヤキの器高は、13.1～19.3 センチで、すべて小壺である。

志戸桶当地出土品（第 17 図、写真 25）

志戸桶集落当地において出土したカムィヤキである。『南日本文化 6』によると、耕作中発見された資料で、長径 40 センチほどの珊瑚礁性の平たい石で蓋をした状態で発見された。完形品カムィヤキの中には、鉛ガラスの玉が納められていた。文様は頸部から胴部最大部にかけて、5 条の波状沈線文を施し、底部に「×」印がある。口縁部を一部欠損しているが、ほぼ完形品の小壺である。

山田中西遺跡出土品

『城久遺跡群山田中西遺跡 I』によると、山田中西遺跡において土坑墓から出土したカムィヤキが、2 点報告されている。

土坑墓 1 号副葬品（第 18 図、写真 26）

工事中に発見されたもので、口縁部分を欠損している以外は完形品である。残器高 12.2 センチ、胴部最大径 14.5 センチ、底径 9.3 センチの小壺である。頸部から胴部最大部にかけて、ヘラ描きの波状文が 7 本施されている。土坑墓では、焼骨や炭化物が検出されているが、完形品カムィヤキの中に納められていないため、蔵骨器ではなく副葬品であると考えられる。白磁碗と滑石製品が共伴している。

土坑墓 2 号副葬品（第 19 図、写真 27）

土坑墓 2 号出土のカムィヤキである。口縁部分の一部を欠損し胴部下部に穿孔があるが、ほぼ完形品である。炭化物と焼骨片のかたまりの脇に埋納されていた。蔵骨器ではなく副葬品であると考えられる。器高 12.7 センチ、口径 9.5 センチ、胴部最大径 18.0 センチ、底径 9.8 センチの小壺である。頸部から胴部最大径にかけて文様が施されている。文様は頸部から、波状文（3 条）→横沈線文（1 条）→波状文（3 条）→横沈線文（1 条）→波状文（1 条）の順番で施されている。穿孔は、焼成後外面からの穿孔であり 1 × 2.5 センチの穿孔であると報告されている。

川嶺集落出土品（第 20・21 図、写真 28）

川嶺集落において耕作中、間隔をおいて発見されたカムィヤキである。『南日本文化 6』によると、川嶺集落民の所有地から 3 点の完形品カムィヤキが出土した、と報告されている。残念ながら 1 点の所在は不明である。双耳小壺は、口縁部分を一部欠損しているが、ほぼ完形品で、小さな耳が縦位に二箇所付いている。文様は、波状文と横沈線文を交互に施している。もう 1 点の完形品カムィヤキは、小壺で、口縁部から胴部の一部を欠損している。頸部から胴部最大部にかけて、波状文と横沈線文を施している。外面施文範囲下部底部近くに、窯印と思われる「*」がヘラ描きされている。

羽里集落出土品（第 22 図、写真 29）

『南日本文化 6』によると、羽里集落のタテイシより 25 メートルほど離れた畠において、耕作中に発見されたカムィヤキである。口縁部の一部と底部を欠損しているが、ほぼ完形品の小壺である。

白木原氏の報告によると、「底部の破壊は意識的なものではなく、底の造りが異常に薄かったため、不随意に抜けたものようである。」と報告されている。

喜界町出土品1（第23図、写真30）

『南日本文化6』によると、喜界町出土のカムィヤキであるが、出土地点及び出土状況は不明である。口縁部を3箇所欠損しているが、ほぼ完形品の小壺である。文様は施されていないが、肩に「×」印、底部に「井」印がある。底部の印は、焼成後のものであると報告されている。『考古資料大観12』では、肩のヘラ描きは「天？」底部のものは「井？」と報告されている。

喜界町出土品2（写真31）

『考古資料大観12』によると、喜界町出土のカムィヤキであるが、個人蔵であり出土地点及び出土状況は記載されていない。口縁部を一部欠損し、底部に穿孔がある。器高は11.0センチで、ほぼ完形品の小壺である。写真で確認すると、波状文が確認できる。

喜界地区では、完形品カムィヤキが13点確認されている。他地区の出土点数からすると、出土数が多いことが確認できる。

（6）徳之島地区

西阿木名集落出土品（第24図、写真32）

西阿木名集落出土のカムィヤキであるが、出土地点及び出土状況は不明である。『南日本文化6』によると、欠損の無い完形品カムィヤキである。小壺であるが、頸部以上が直立し、口唇部だけが僅かに外折するというカムィヤキでは特異な器形をしている。叩き目は残っているが、文様は施されていない。

井ノ川集落出土品（第25図、写真33）

徳之島井ノ川において出土したと伝承されるカムィヤキであるが、出土地点及び出土状況は不明である。口縁部分を欠いている他は完形品の小壺である。残存高は15.0センチで、頸部から胴部最大部にかけて、波状文と横沈線文を施している。文様は頸部から、渦巻状波状文（4条）→横沈線文（1条）→渦巻状波状文（2条）→横沈線文（1条）→渦巻状波状文（2条）→沈線文（1条）の順番で施されている。渦巻状波状文が他資料と反対方向に施してある為、回転方向が逆である可能性が高い。

徳之島地区では、完形品カムィヤキが2点確認されている。生産地としては、極端に少ない出土のように思われる。

以上、現在確認されている完形品カムィヤキを概観してみると、器高10~15センチ程度の小壺で、文様を施したものが多いことが確認できる。生産地である徳之島での出土が2点であるのに対し、喜界地区や瀬戸内地区に確認例が多いことを考えると、これらの小壺は、生活雑器として使用され破棄された資料ではなく、何らかの意図を持って埋められたものであると推測される。

四、瀬戸内町出土の完形品カムィヤキについて

完形品カムィヤキの研究については、これまでにも様々な研究者が取り上げており、優れた研究や概

説がなされている。しかし、完形品カムイヤキの研究対象の多くは、奄美大島北部や喜界島の資料を中心である。瀬戸内町出土の完形品カムイヤキは、出土量が 10 点と多いながらも、これまで余り論じられることはなかった。それは、出土状況や所在が判然としていない点や多くの資料が個人蔵であったためである。今回、瀬戸内町において、新たに 1 点の完形品カムイヤキが確認され、聞き取り調査により各資料の出土状況もおぼろげながら見えてきた。そこで、瀬戸内町出土の完形品カムイヤキについて先行研究を踏まえて、改めて整理を行いたい。

完形品カムイヤキの出土状況について

先行研究や出土状況によると、完形品カムイヤキとして出土する資料には、多くの共通点がある。

①カムイヤキの中でも、器高 10~15 センチ程度の小壺である。

②文様若しくはヘラ描きを施しているものが多い。

③人骨と共に伴することがあり、人骨は焼骨である場合がある。

④玉縁口縁白磁や滑石と共に伴することがある。

⑤偶発的に発見されることが多く、遺跡では、埋葬に関わる事例が多い。

以上の 5 点の特徴は、遺跡から破片として出土するカムイヤキや、カムイヤキ古窯跡群で出土するカムイヤキと比較してみると、異なる出土状況であることがわかる。では、それぞれの特徴について瀬戸内町出土の完形品カムイヤキも含めて確認してみる。

①については、前節までに概観した個々の完形品カムイヤキの多くが、器高 10~15 センチの小壺であることを確認した。完形品として出土したカムイヤキは、破棄された遺物ではなく、この大きさの小壺を意図して埋蔵したことが推測できる。

②については、すべての資料について文様若しくはヘラ描きが施されているというわけではないが、今回確認できた 36 点のカムイヤキの内、何らかの文様を施している資料は 26 点である。約 7 割の資料に文様若しくはヘラ描きが施されており、文様等が施されている完形品カムイヤキを意図して埋蔵したと推測できる。

③人骨と共に伴する点は、先行研究で最も取り上げられ、注目されている点である。人骨との共伴及びその可能性が高い例は、完形品カムイヤキ 36 点のうち 7 点である。完形品カムイヤキ全体の割合から見ると約 2 割であるが、奄美諸島において人骨の出土例が少ない点を考慮すると、7 点の資料が人骨と共に伴している事実は興味深い。また、山田中西遺跡 I や宇宿貝塚（完形品カムイヤキではなく 10 世紀前後の陶質土器）では、焼骨が確認されており火葬を行っている可能性も高い。当該時期の奄美諸島において、火葬が通常的に行われているとは考えにくく、特異な例であると言える。

瀬戸内町出土の完形品カムイヤキは、与路島と勢里集落で人骨との共伴が確認されている。与路島では、人骨に石器と完形品カムイヤキが共伴して出土した、と聞き取り調査において収集されているが、人骨は所在不明である。勢里集落では、完形品カムイヤキと共に焼けた大きな骨が出土したという。勢里集落の骨も所在不明であるため、人骨であるか判然としないが、他の完形品カムイヤキの状況から人骨（焼骨）であると推測される。瀬戸内町で出土した人骨は、完形品カムイヤキに納められていない事が確認できる。

④玉縁口縁白磁や滑石は、山田中西遺跡 I や小湊集落において、完形品カムイヤキと共に伴している。

玉縁口縁白磁や滑石が流通していた時期は、カムイヤキが生産されていた時期と重なるため、共伴の事実は不自然ではない。亀井明徳氏の「南西諸島における貿易陶磁の流通経路」によると、奄美市名瀬小湊において完形品の陶磁器が 10 点出土したと報告されており、亀井氏は、出土陶磁器は蓋と身のセットであった可能性が強いと指摘している。これまでの先行研究において、③の人骨との関連から、これらの遺物は、副葬品若しくは蔵骨器の蓋として使用したと考えられる。

⑤完形品カムイヤキは、遺跡からの出土ではなく偶発的に発見されることが多い。このことは、完形品カムイヤキが、周知の遺跡や遺物散布地の範囲外で発見されることが多いからである。また、遺跡内での発見においても埋葬に関わる地点に多く、遺跡の生活空間と隔離された場所に多い。瀬戸内町出土の完形品カムイヤキも全て偶発的に発見されている。周知の遺跡及び遺物散布地内の出土品もあるが、完形品カムイヤキ以外の遺物は確認されないことが多い。

また、完形品カムイヤキは、伝世品であることが多い。これは、完形品カムイヤキが偶発的に発見されることが多い点に由来するのではないだろうか、須子茂集落伝世品のように有力者の家に伝世しているのは、集落出土の資料を有力者及び集落が保管していたためである可能性がある。

先行研究や出土状況から、以上の 5 点について確認したが、出土状況については、瀬戸内町出土品も他地区の出土品も同様の様相を呈しており、同じ意図を持って埋蔵したものであると推測される。その意図するところは、先行研究の指し示すように、埋葬に関連した蔵骨器ないし副葬品である可能性が高い。ただし、蔵骨器として確認できる例は少なく、遺跡で確認できる資料も人骨を納めていないことから、蔵骨器としての使用より副葬品として使用している可能性が高い。

完形品カムイヤキを副葬品として使用している例は、山田中西遺跡 I があり、副葬品の可能性について考えると、志戸桶当地出土の鉛ガラス玉も副葬品の可能性がある。出土地点の土壤によって、人骨は残りにくい場合があり、完形品カムイヤキやガラス玉のみが発見された可能性がある。

焼骨が出土している点を考えると、仏教思想との関連も考えられる。遺体を火葬したと考えるのが一般的であるが、洗骨・改葬の可能性もあり、今後検討しなければならない課題のひとつである。また、当該時期の奄美諸島において、このような埋葬方法が一般的であるとは考えにくく、一部の集団において行われていた埋葬方法であると考えられる。また、仏教思想との関連を考えると、『先史・古代の鹿児島 遺跡解説』第 4 節奈良・平安の諸問題において、喜界島で珊瑚に墨書を施す「珊瑚経」が報告されており、埋経の可能性も考えられる。また、墓以外にも交通の安全や地鎮においても壺等を埋蔵している例が報告されている。

瀬戸内町出土の完形品カムイヤキの出土状況を、先行研究や出土状況から確認してみると、他地区的出土品と多くの共通性があり、埋葬に関わる遺物である可能性が高いことが推測される。しかし、鹿児島県内において交通の安全や埋経、地鎮など埋葬以外にも壺を埋蔵する事例があり、このことについても今後検討が必要である。

完形品カムイヤキの出土地点の分布について

前述したとおり、完形品カムイヤキは、埋葬に關係した遺物である可能性が高いことが推測される。では、完形品カムイヤキの広域出土分布はどうであろうか、この点についても優れた先行研究や概説がなされているので、先行研究を踏まえて完形品カムイヤキの出土分布状況の整理を行いたい。



第3図 奄美諸島における完形品カムイヤキの出土分布図

奄美諸島における完形品カムイヤキの出土分布は、喜界島及び奄美大島の東側に集中しており、確認総数は、36点である。そのうちの10点が瀬戸内町出土品であることは前述した通りである。完形品カムイヤキの出土総数の約3割が瀬戸内町出土であり、瀬戸内町出土の完形品カムイヤキの数量は少なくないことがわかるが、奄美諸島出土の完形品カムイヤキは、満遍なく分布しているわけではない。第3図を見てみると、完形品カムイヤキは、奄美諸島の中でも喜界島と奄美大島の東側に多く、沖永良部島と与論島では確認されていない。カムイヤキの流通範囲は、第1図で確認できる通り南九州を含む南西諸島全域である。カムイヤキ古窯跡群が存在する徳之島が、南西諸島のほぼ中央にあり、カムイヤキが南北に広く流通している様子が伺える。しかし、完形品カムイヤキの集中出土地域は、喜界島と奄美大島の東側に集中している。生産地である徳之島でも出土しているが、2点のみの確認であり生産地としては少ないと言えるだろう。

このような完形品カムイヤキの出土状況や土師器・須恵器の出土状況から、高梨修氏は、「喜界島・奄美大島北部に形成されはじめた政治的勢力圏が当該地域の経済的権益を掌握していた可能性はきわめて高い」とし、そのような勢力範囲を喜界島・奄美大島勢力圏として仮称し喜界島を中心とした倭人の拠点・勢力圏の設定を行っている。当該時期の南西諸島の遺跡を概観してみると、喜界島・奄美大島北部の遺跡は、南西諸島では殆ど確認できない陶磁器や滑石製石鍋、土師器・須恵器が数多く確認されており、このような勢力圏が存在していた可能性は、遺物の上からも確認できる。しかし、瀬

戸内町や奄美市住用などは、設定された喜界島・奄美大島勢力圏の圏外にあたるが、完形品カムイヤキの出土点数は、奄美市笠利の出土点数より多い。このような勢力圏外の完形品カムイヤキの説明は行われていない。

喜界島の土師器・須恵器の出土状況から、喜界島と大宰府の政治的関係の可能性を初めて指摘したのは、池畠耕一氏である。池畠氏は、土師器・須恵器の出土分布だけでなく、布目压痕土器の出土分布にも注目している。布目压痕土器の出土が喜界島で確認されず、奄美大島に集中分布していることから、これら布目压痕土器の出土遺跡は港湾として機能していた可能性があると指摘している。

このように、これまでの完形品カムイヤキの研究は、喜界島を中心とした研究が中心であった。これらの先行研究は、喜界島の特異性や大宰府との関係、そして葬送との関係が研究の中心であり、瀬戸内町の完形品カムイヤキの説明は十分になされていない。そこで、先行研究を踏まえて瀬戸内町の完形品カムイヤキの出土分布を見てみると、高梨氏の設定した喜界島・奄美大島勢力圏の範囲には、含まれないことがわかる。また、『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』を確認してみると、土師器・須恵器・滑石は、表面採集されているが、喜界島のように多く確認されることはない。遺物から確認しても、高梨氏が設定する勢力圏外であると考えられる。また、池畠氏の指摘する布目压痕土器については、第2図で確認してみると、瀬戸内町では8箇所で表面採集されている。完形品カムイヤキと重複する地点でも確認されているが、外洋側の良好な湾に多いと言える。

では、もう一度広域における完形品カムイヤキを整理してみたい。各地区での出土地点数を確認してみると、瀬戸内地区は7地点（他不明1点）、笠利地区は2地点、龍郷地区は1地点（他不明1点）、名瀬地区は2地点、住用地区は3地点、喜界地区は5地点（他不明2点）、徳之島地区は2地点であり、合計は、21地点（不明4点）である（志戸桶集落は、七城と当地を別地点として計測）。瀬戸内町出土品は、個体数では喜界島より少ないが、出土地点数は全体の約1/3であり、他の地区よりも多いことがわかる。

また、喜界島での出土地点は台地上に多く、海岸の近くには少ないと、瀬戸内町出土の完形品カムイヤキは、海岸近くで出土することが多い。島の地形との関係もあるが、喜界島の完形品カムイヤキは、島の中央部に集中しており、瀬戸内町の完形品カムイヤキは、広域分布し海岸近くに埋蔵されている。このように概観すると、奄美大島南部の完形品カムイヤキの出土地点は、湾状の地形に集中しているのが確認できる。また、池畠氏の指摘している布目压痕土器も含めて確認してみると、奄美大島南部及び加計呂麻島、請島、与路島の湾では、布目压痕土器若しくは完形品カムイヤキが出土していることが確認できる。これらの資料が存在する地点は、喜界島と徳之島を結ぶ地域の港として良好な湾と重複することがわかる。また、加計呂麻島には31の集落があるが、完形品カムイヤキが確認された須子茂集落及び勢里集落は、加計呂麻島でも唯一徳之島が遠望できる集落である。請島・与路島も集落の山から徳之島が確認できる地点に存在する。そして、奄美大島側の完形品カムイヤキ出土地点では、喜界島が遠望できる若しくは集落の山などから確認できる集落に存在することが多い。

以上の点から、これら完形品カムイヤキが出土する地点（湾）は、港湾として利用された可能性があるのではないかと考えられる。完形品カムイヤキが埋蔵された目的は、埋葬に関わる可能性が高いことは先行研究や出土状況において確認できるが、これら港湾として利用されたと考えられる地点の

資料は、どのように推測するべきであろうか。高梨氏が設定している喜界島・奄美大島勢力の圏外ではあるが、このような勢力の中で港湾の見張りのような役目の人物がいて、その死後に埋蔵された資料であろうか。もしくは、航行中に亡くなった者の埋葬の跡であろうか、今後の検討課題である。また、港湾として利用されていたとすると、他にも嘉徳湾や諸鈍湾、伊子茂湾など港として良好な湾において、完形品カムィヤキが新たに確認される可能性があり、今後の調査において注意しなければならない。

五、おわりに

瀬戸内町の完形品カムィヤキについて、奄美諸島で確認されている完形品カムィヤキの個々の出土状況と広域における分布状況を確認して考察を行った。その結果、喜界島を中心とする勢力圏と徳之島カムィヤキ古窯跡群とを結ぶ地域に完形品カムィヤキが集中することが確認できた。それら完形品カムィヤキ出土地は、港として良好な湾を有し、現在でも港湾として利用されている地域であり、喜界島若しくは徳之島が遠望できる地点に存在する。また、布目压痕土器など港湾を示す資料も存在することから、これらの地点は、喜界島と徳之島を結ぶ地域での港湾的な役割を果たした地点ではないかと考えられる。

港湾として使用された地点であると仮定すると、瀬戸内町は喜界島と徳之島を結ぶ地域の中でも最も入り江や島が多く、港湾や見張りの場として重要な地点であったのではないかと考えられる。港湾や航路の見張り役の人物の埋葬、若しくは航行中に亡くなった者の埋葬に関わる可能性があり、その際の埋蔵物が現在まで存在している可能性がある。完形品カムィヤキが遺跡や遺物散布地と一致しない地点で出土する点は、このような生活と隔絶した資料であるため、若しくは元々の島民ではない人物の埋葬であるからではないかと推測できる。

また、港湾的な使用をしていた地点であるとするならば、他にも港湾に適した湾が複数存在する。今後は、このような地点での遺物の確認が必要になってくる。また、個々の資料の出土状況及び資料についても、もっと詳細に調査を行う必要があり、近接する遺跡及び遺物散布地との関係も詳細に比較検討する必要がある。

今回は、瀬戸内町出土の完形品カムィヤキの報告を中心に、瀬戸内町の完形品カムィヤキの考察を行ってみた。考察の結果、瀬戸内町の完形品カムィヤキ出土地点は、港湾として利用していた地点である可能性が推測できた。しかし、本当に港湾として利用されたのか、誰がどのような目的で埋蔵したのかなど、以前不明な点が多く、資料も少ない。

瀬戸内町を含む奄美大島南部は、発掘調査数が少なく今後も完形品カムィヤキが発見される可能性は十分あり、今後の資料増加により詳細な情報が確認される可能性が高い。また、城久遺跡群やカムィヤキ古窯跡群の調査研究は、地元教育委員会や大学関係者が多方面から調査を進めており、今後の研究により資料数が増加することは間違いない、新たな見解が出される可能性もある。

完形品カムィヤキの研究課題は未だ山積みであり、調査・研究もこれからである。しかし、地道に調査・研究を行い、問題を解決していくしか方法はない。

参考文献

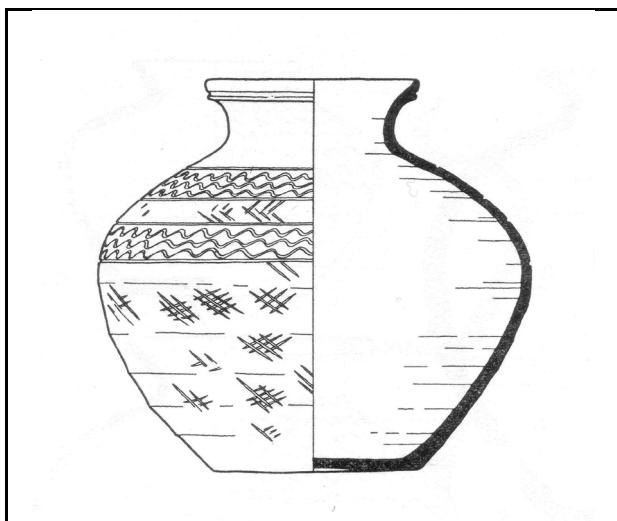
- 池田榮史 「増補・類須恵器出土地名表」『琉球大学法文学部人間科学科紀要 人間科学』2003
- 池田榮史 「類須恵器と貝塚時代後期」『考古資料大観』12 2004
- 池田榮史 「類須恵器とカムイヤキ古窯跡群—その名称をめぐってー」『肥後考古』13 2005
- 池田榮史 『南島出土類須恵器の出自と分布に関する研究』 2005
- 池田榮史 「琉球列島（南西諸島）の古墓」『考古学ジャーナル』12 2006
- 池田榮史 （「中世東アジアの交流・交易システムに関する新研究戦略の開発・検討」班） 『平成18年度シンポジウム古代・中世の境界領域—キカイジマの位置付けをめぐってー』2007
- 伊仙町教育委員会 『カムイヤキ古窯跡群 I』 1985
- 伊仙町教育委員会 『カムイヤキ古窯跡群 II』 1985
- 伊仙町教育委員会 『カムイヤキ古窯跡群 III』 2001
- 伊仙町教育委員会 『カムイヤキ古窯跡群シンポジウム資料集』 2002
- 伊仙町教育委員会 『徳之島カムイヤキ古窯跡群』 2005
- 伊仙町教育委員会 『カムイヤキ古窯跡群IV』 2005
- 鹿児島県教育委員会 『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書 II』 1990
- 鹿児島県教育委員会 『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書 III』 1991
- 鹿児島県教育委員会 『先史・古代の鹿児島 通史編』 2006
- 笠利町教育委員会 『宇宿貝塚発掘写真集』 1995
- 笠利町教育委員会 『宇宿貝塚発掘写真集No.2－主な出土遺物を中心にして－』 1996
- 笠利町教育委員会 『宇宿貝塚出土人骨編－笠利町文化財報告第23集－』 1997
- 笠利町教育委員会 『笠利町万屋城－笠利町文化財報告第24集－』 1997
- 笠利町教育委員会 『宇宿貝塚 宇宿貝塚ふるさと歴史の広場整備事業報告書』 2001
- 亀井明徳 「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』11 1993
- 喜界島郷土研究会・九州国立博物館誘致推進本部 『喜界島研究シンポジウム古代・中世のキカイジマ資料集』 2005
- 喜界町教育委員会 『城久遺跡群 山田中西遺跡 I』 2006
- 里山勇廣 「奄美諸島・古代概観」『新沖縄文学』81 1989
- 島袋綾野 「宮古・八重山諸島の古墓」『考古学ジャーナル』12 2006
- 白木原和美 「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」『南日本文化』6 1973
- 新里亮人 「徳之島カムイヤキ古窯産製品」『赤木名グスク遺跡』 2003
- 澄田直敏 『城久遺跡群調査概報』 2005
- 瀬戸内町教育委員会 『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』 2005
- 高梨修 『ヤコウガイの考古学』 2005
- 高梨修 「奄美諸島の古墓」『考古学ジャーナル』12 2006
- 長嶺操 「沖縄諸島の古墓」『考古学ジャーナル』12 2006
- 名瀬市教育委員会 『徳之島カムイヤキ窯跡群の世界—徳之島をめぐる歴史と文化ー』 2001

奄美諸島出土の完形品カムイヤキー覧表

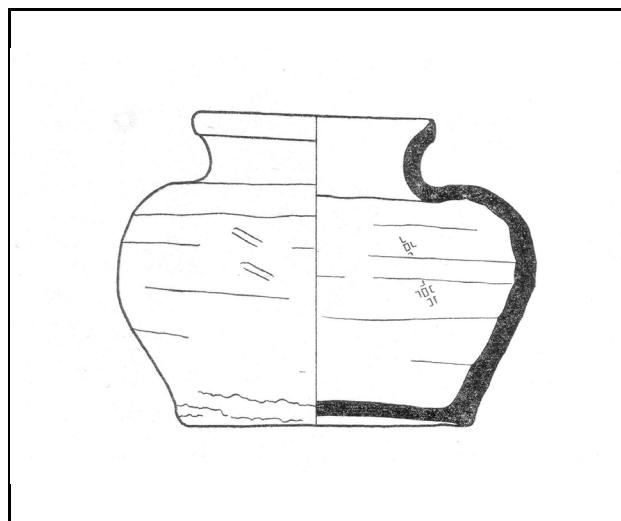
	名 称	出土地	器 高	口 径	頸部径	胴 部 最大径	底 径	文 様	備 考
1	節子出土品①	瀬戸内	残13.5	欠損	9.0	20.2	12.2	渦巻状7条の波状文	底部に穿孔有
2	節子出土品②	瀬戸内	11.8	10.3	8.4	16.0	9.0	渦巻状波状文、沈線文	頸部に穿孔有(二箇所)
3	節子出土品③	瀬戸内	11.6	8.0	7.5	14.5	8.5	輪状5条の波状文	頸部に穿孔有(二箇所)
4	安脚場出土品	瀬戸内	残15.6	欠損	8.5	21.0	11.0	渦巻状6条の波状文	焼成不良(ヒビ有)
5	須子茂伝世品	瀬戸内	11.1	10.3	9.5	15.5	9.5	ヘラ記号?	ヘラ記号らしきもの有
6	勢里出土品	瀬戸内	13.0	8.5	6.9	15.0	9.5	輪状5条の波状文 ヘニヨロツ	ヘラ記号らしきもの有
7	池地出土品	瀬戸内	15.8	12.0	9.8	20.0	12.0	なし	胴部最大径付近に補修跡有
8	阿木名出土品	瀬戸内	16.3	8.8	6.7	17.8	8.5	輪状波状文、沈線文	胴部を1/6ほど欠損している。『考古資料大観12』の器高数値、『南日本文化6』実測図より
9	与路出土品	瀬戸内	11.4	8.8	7.6	15.1	10.3	なし	現在所在不明。『南日本文化6』実測図より
10	加計呂麻出土品	瀬戸内	残7.0	欠損	7.0	11.8	6.5	渦巻状5条の波状文、ヘラ記号?	底部に「天」文字と思われるヘラ書き有。『赤木名グスク遺跡報告書』実測図より
11	宇宿貝塚	笠 利						なし	乳児人骨と共に出土
12	万屋城遺跡	笠 利	残9.4	欠損	6.8	16.7	9.0	波状文、沈線文	遺跡にて人骨出土
13	円集落	龍 郷	残15.9	欠損	12.7	20.7	11.4	なし	『南日本文化6』実測図より
14	龍郷町出土品	龍 郷	17.0					波状文、沈線文、ヘラ記号?	『考古資料大観12』より
15	名瀬小学校	名 瀬	9.7	6.9	5.8	13.2	7.6	波状文、ヘラ記号?	『考古資料大観12』の器高数値、『南日本文化6』実測図より
16	小湊集落	名 瀬						なし	陶磁器10点と共に伴
17	城集落①	住 用	12.5					なし	『考古資料大観12』より
18	城集落②	住 用	12.3					なし	『考古資料大観12』より
19	川内集落	住 用	15.8	10.2	7.6	17.7	12.3	波状文	底部に鉢痕有。『考古資料大観12』の器高数値、『南日本文化6』実測図より
20	石原集落①	住 用						なし	口縁部が窄まっている
21	石原集落②	住 用	13.0	7.6	7.0	16.2	9.3	なし、ヘラ記号?	『考古資料大観12』の器高数値、『南日本文化6』実測図より
22	志戸桶(七城)①	喜 界	13.1	8.6	7.8	15.5	9.0	なし	カムイキ5点と完形品石鍋(横鋸)共伴。『南日本文化6』、『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅲ』
23	志戸桶(七城)②	喜 界	13.5	8.8	8.1	15.5	8.5	2条波状文	カムイキ5点と完形品石鍋(横鋸)共伴。『南日本文化6』、『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅲ』
24	志戸桶(七城)③	喜 界	14.6	9.8	8.5	16.8	11.9	4条波状文、1条沈線	カムイキ5点と完形品石鍋(横鋸)共伴。『南日本文化6』、『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅲ』
25	志戸桶(七城)④	喜 界	13.2	10.8	8.4	16.8	10.7	6条波状文、2条沈線	カムイキ5点と完形品石鍋(横鋸)共伴。『南日本文化6』、『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅲ』
26	志戸桶(七城)⑤	喜 界	19.3	13.3	11.5	12.5	12.5	8条波状文	カムイキ5点と完形品石鍋(横鋸)共伴。『南日本文化6』、『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅲ』
27	志戸桶(当地)	喜 界	11.5	9.1	7.9	17.7	10.6	波状文	『南日本文化6』実測図より
28	山田中西遺跡①	喜 界	残12.2	欠損	欠損	14.5	9.3	波状文	土坑墓1号出土、白磁碗と滑石製品が共伴。『城久遺跡群－山田中西遺跡I－』
29	山田中西遺跡②	喜 界	12.7	9.5	8.5	18.0	9.8	波状文、沈線	土坑墓2号出土。『城久遺跡群－山田中西遺跡I－』
30	川嶺集落①	喜 界	10.5	10.3	8.5	13.9	9.0	波状文、沈線	耳付き。『南日本文化6』実測図より、『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅲ』
31	川嶺集落②	喜 界	残13.6	欠損	欠損	20.1	9.3	波状文、沈線 ヘラ描き有	『南日本文化6』実測図より、『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅲ』
32	羽里集落	喜 界	14.1	11.4	8.8	18.9	8.8	なし、 底部に穿孔有	『南日本文化6』実測図より、底部に穿孔有
33	喜界町出土品①	喜 界	11.2	11.1	9.9	14.4	9.6	なし、ヘラ記号?	『南日本文化6』実測図より
34	喜界町出土品②	喜 界	11.0					波状文、 底部に穿孔有	底部に穿孔有。『考古資料大観12』より
35	西阿木名集落	徳之島	13.2	6.7	6.4	14.1	8.1	なし	『南日本文化6』実測図より
36	井之川集落	徳之島	残15.0	欠損	6.9	17.2	10.5	波状文、沈線	『南日本文化6』実測図より、『考古資料大観12』器高数値

※網のかかっている欄の数値は、図面等から計測した数値を掲載している。

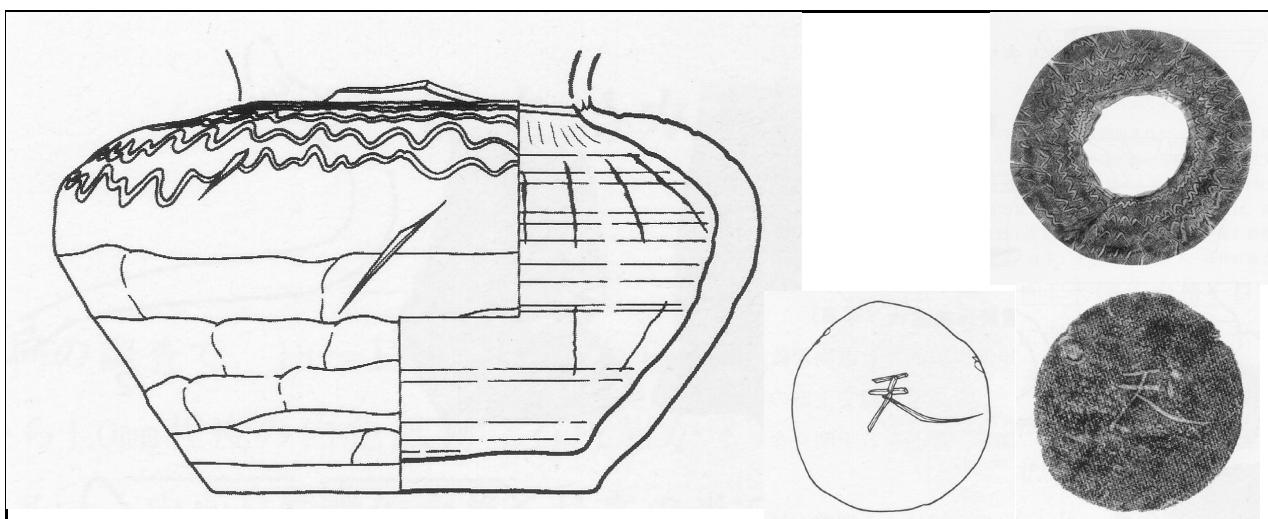
※欠損部分は、欠損と表示。斜線欄は現存するが、実測図及び数値の報告が無い為表示していない。



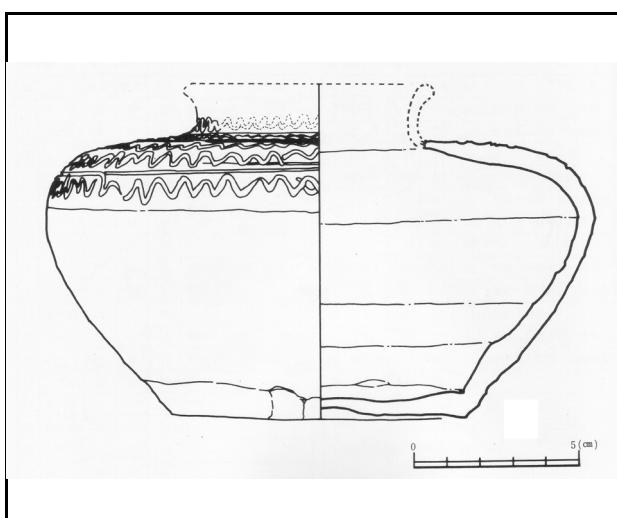
第4図 阿木名出土品



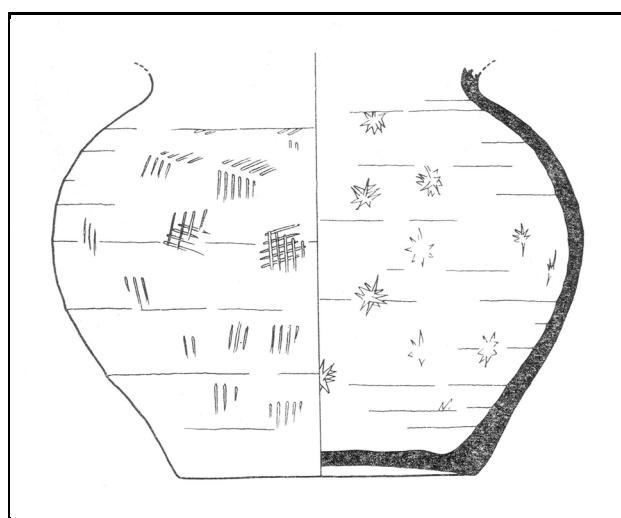
第5図 与路出土品



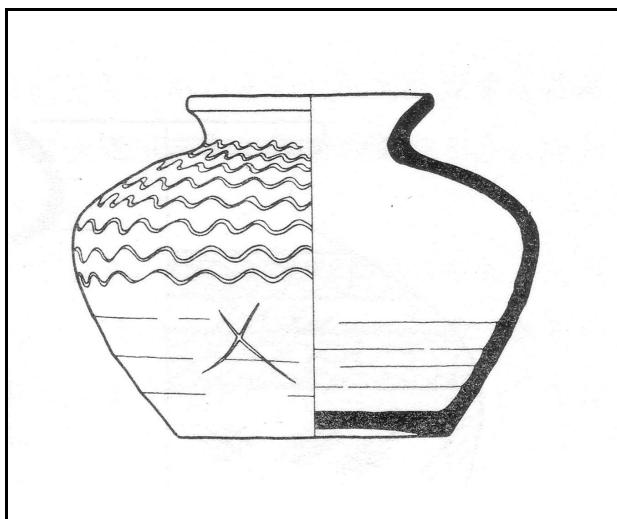
第6図 加計呂麻出土品



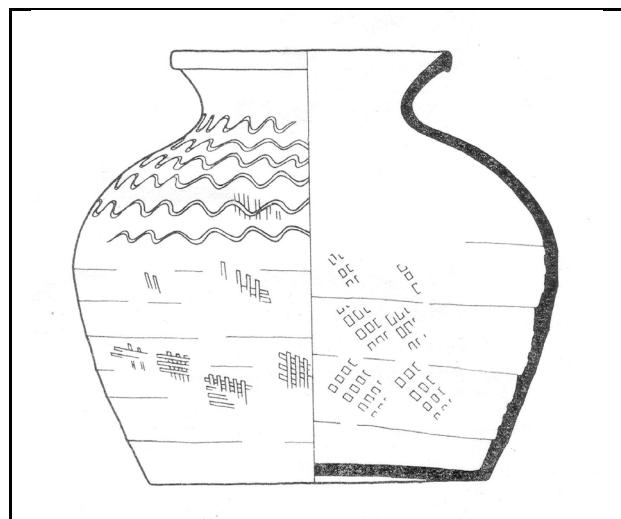
第7図 万屋城遺跡出土品



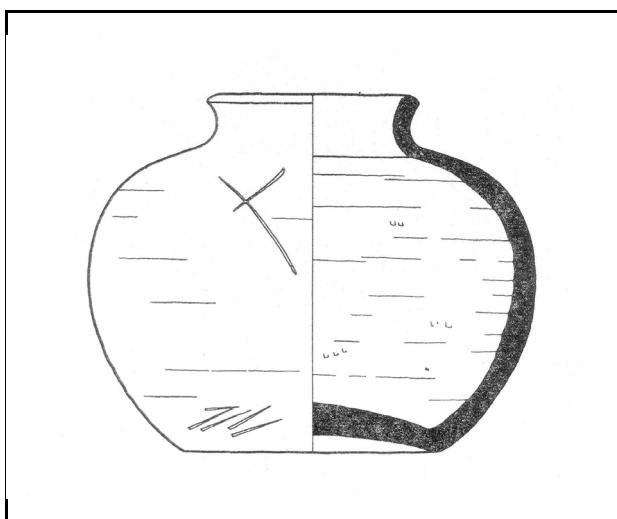
第8図 円集落出土品



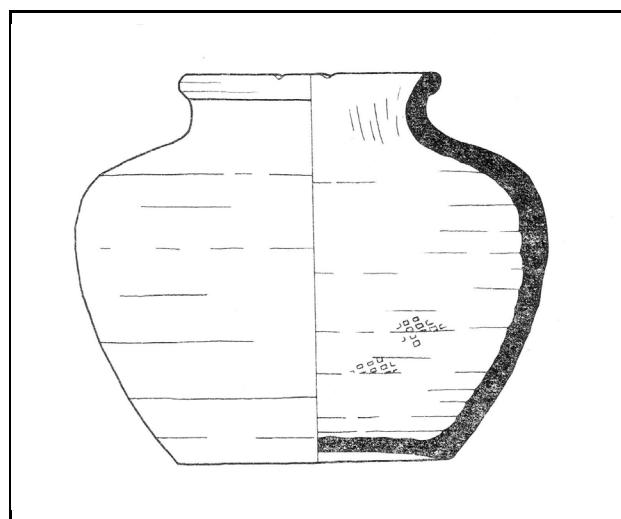
第9図 名瀬小学校出土品



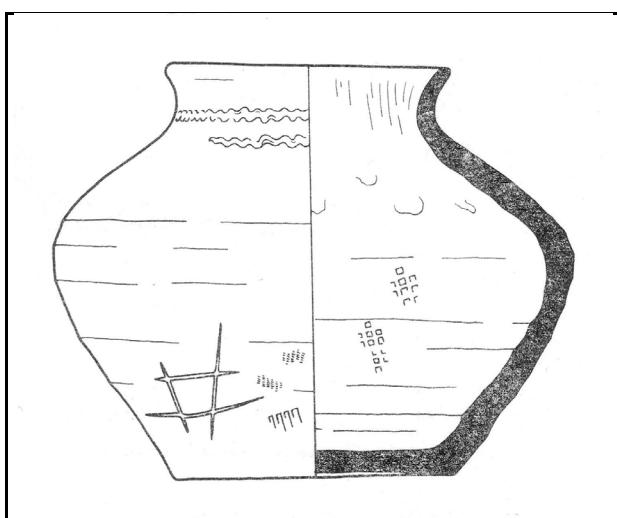
第10図 川内集落出土品



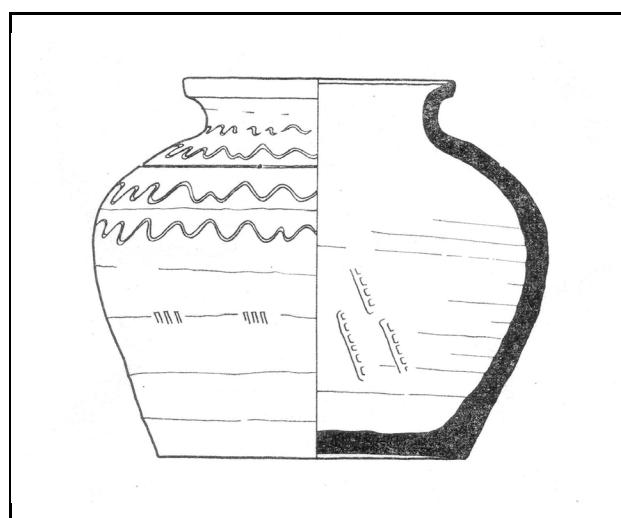
第11図 石原集落出土品②



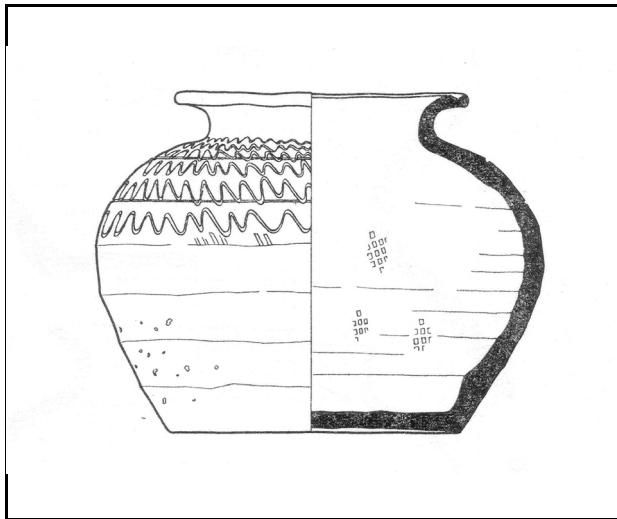
第12図 志戸桶(七城)出土品①



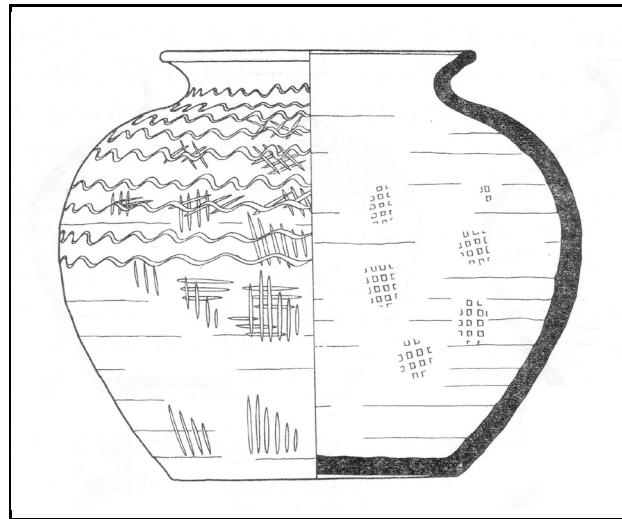
第13図 志戸桶(七城)出土品②



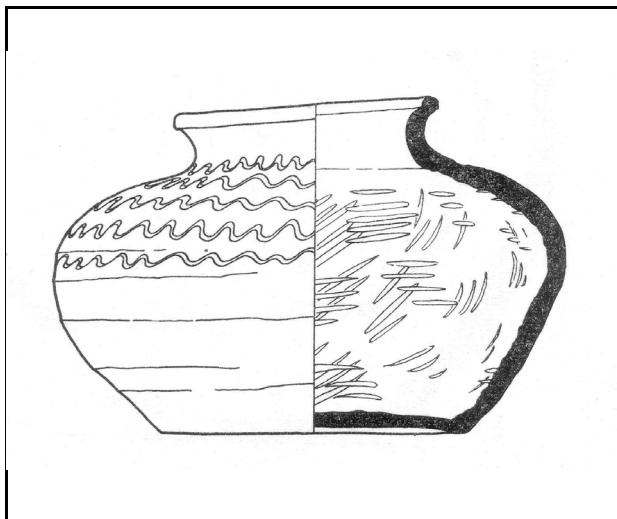
第14図 志戸桶(七城)出土品③



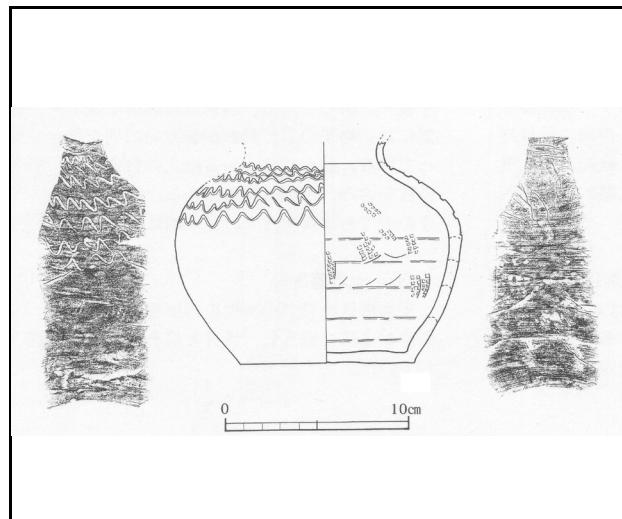
第15図 志戸桶(七城)出土品④



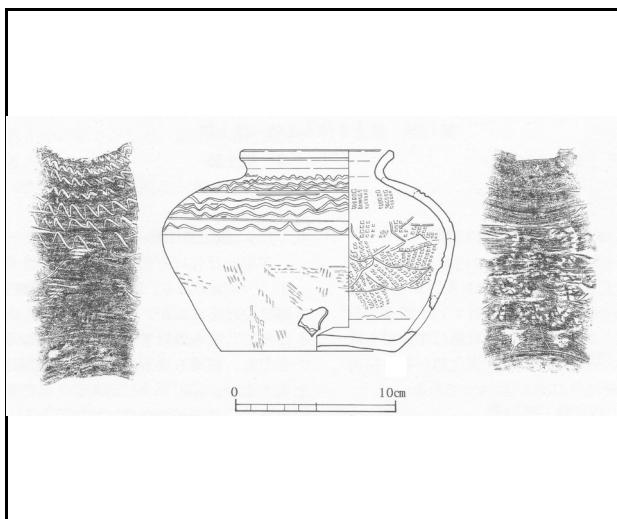
第16図 志戸桶(七城)出土品⑤



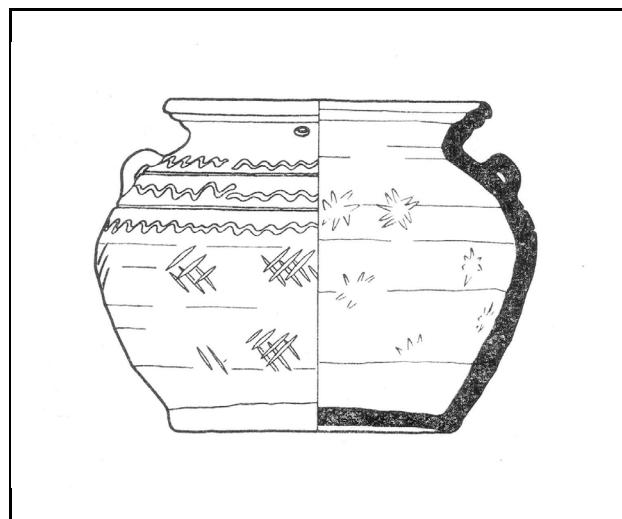
第17図 志戸桶(当地)出土品



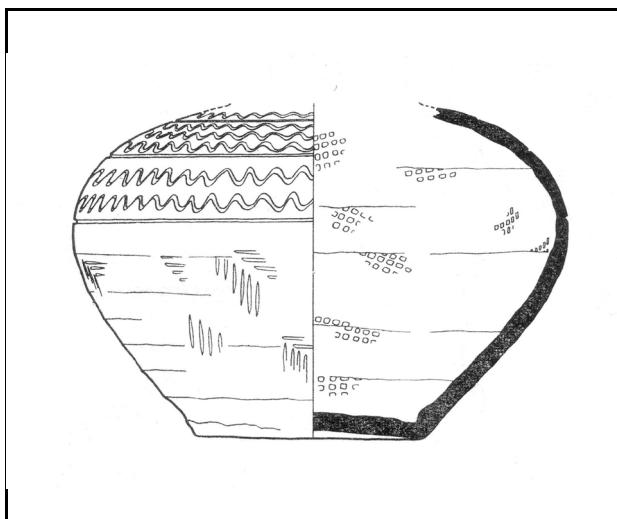
第18図 山田中西遺跡①(土坑墓第1号)出土品



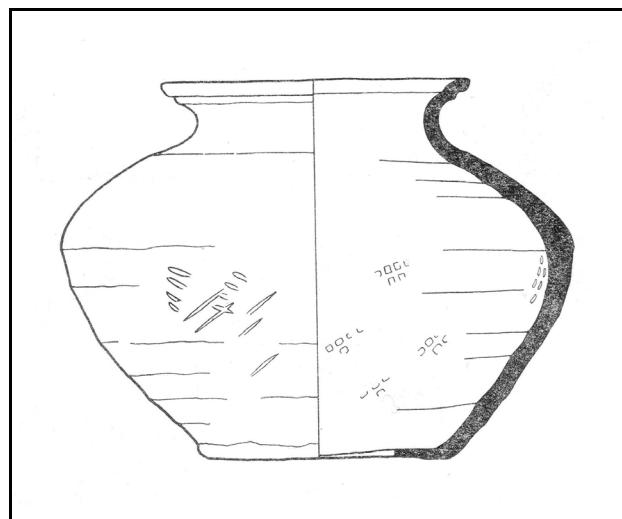
第19図 山田中西遺跡②(土坑墓第2号)出土品



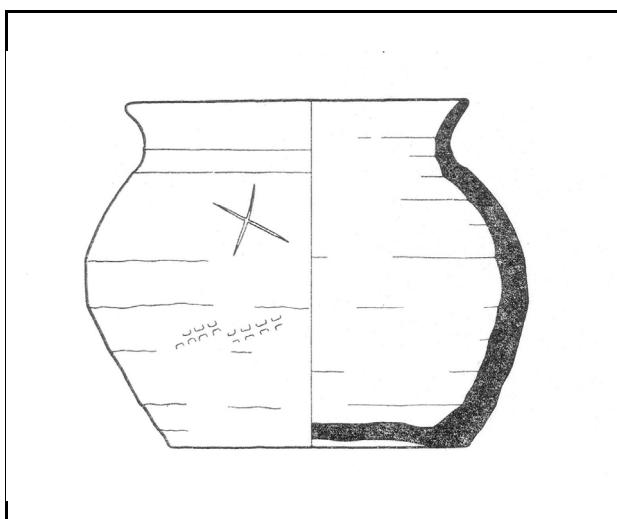
第20図 川嶺集落出土品①



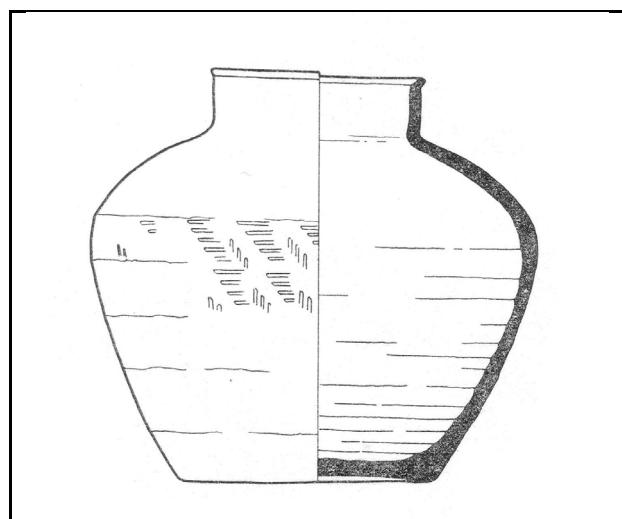
第21図 川嶺集落出土品②



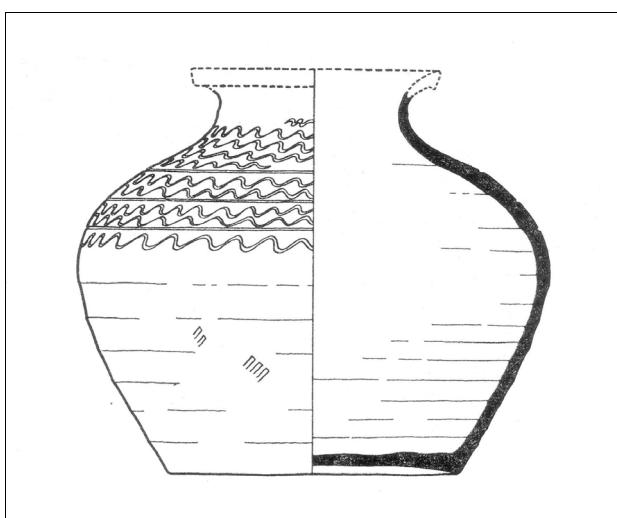
第22図 羽里集落出土品



第23図 喜界町出土品①



第24図 西阿木名集落出土品



第25図 井之川出土品



1. 節子集落出土品①



2. 節子集落出土品②



3. 節子集落出土品③



4. 安脚場集落出土品



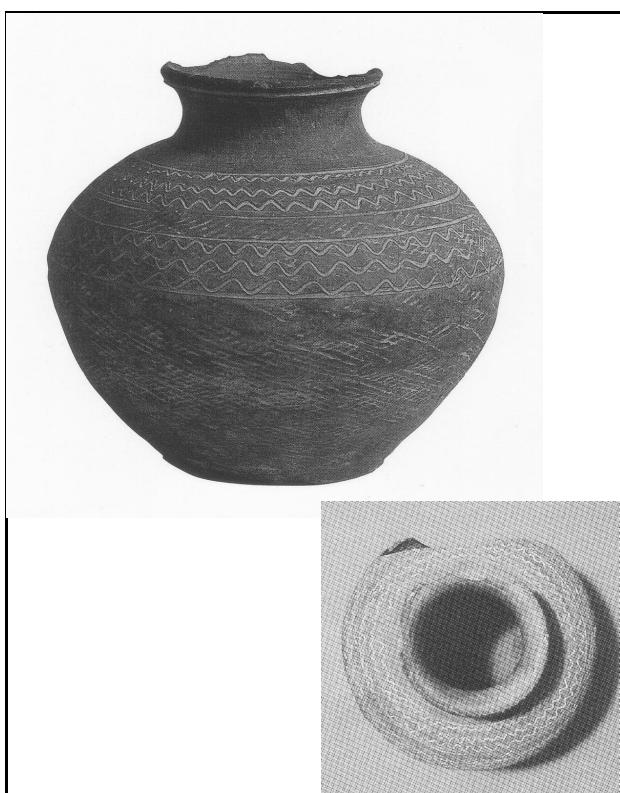
5. 須子茂集落伝世品



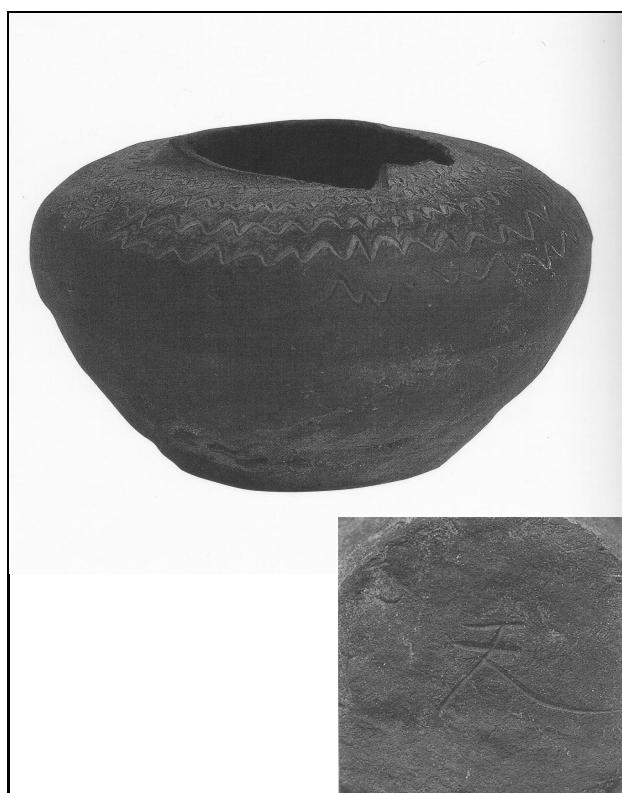
6. 勢里集落出土品



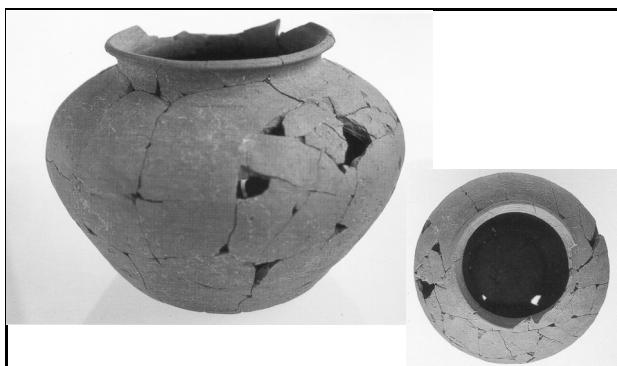
7. 池地集落出土品



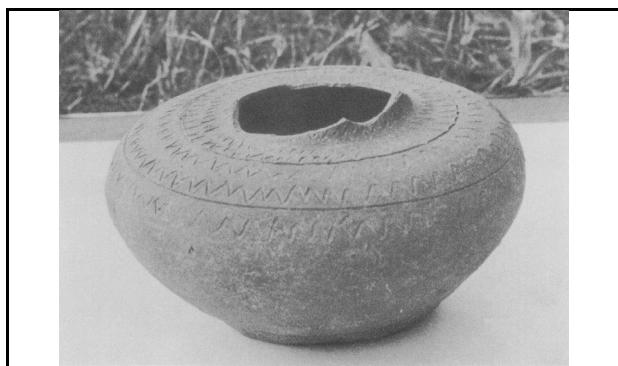
8. 阿木名集落出土品



9. 加計呂麻島出土品



10. 宇宿貝塚出土品



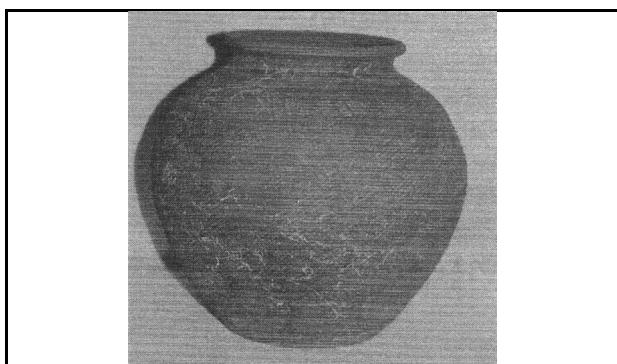
11. 万屋城遺跡出土品



12. 龍郷町出土品



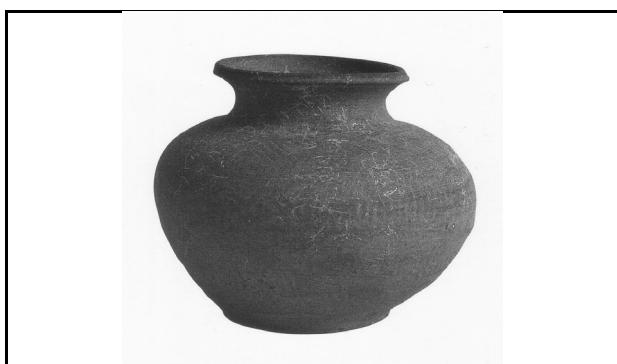
13. 名瀬小学校出土品



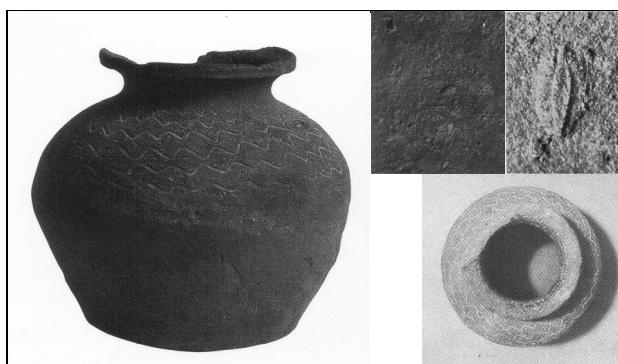
14. 小湊集落出土品



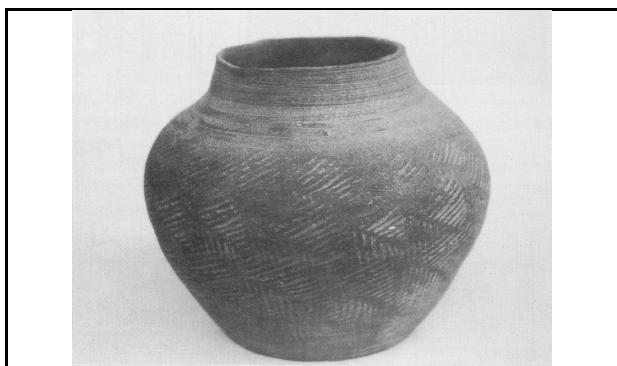
15. 城集落出土品①



16. 城集落出土品②



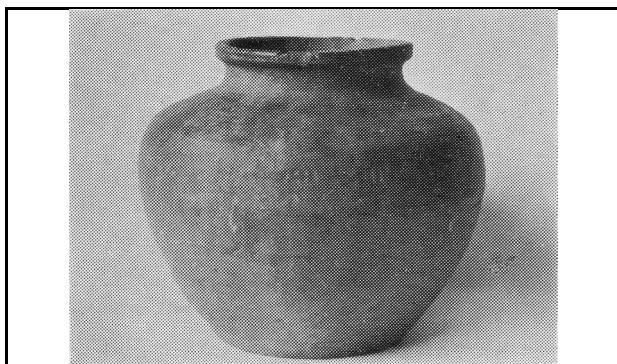
17. 川内集落出土品



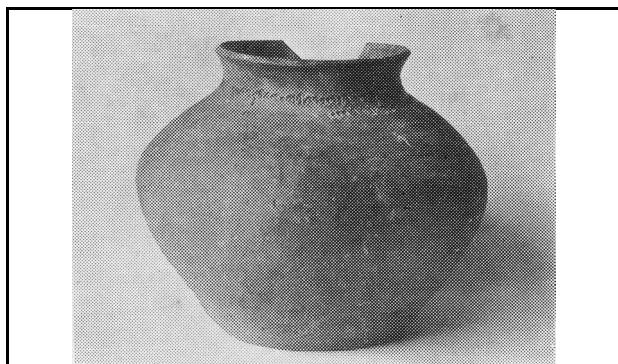
18. 石原出土品①



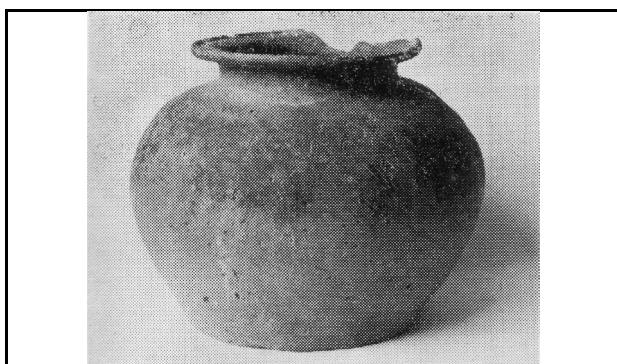
19. 石原出土品②



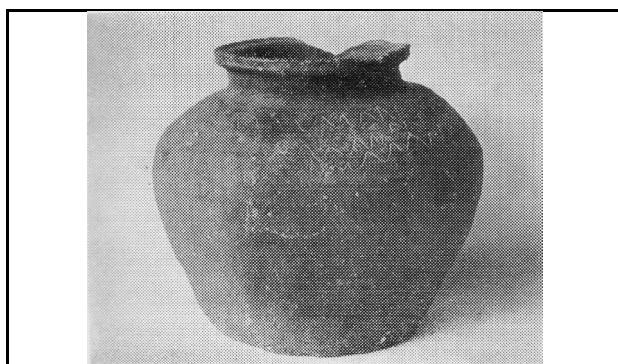
20. 志戸桶(七城)出土品①



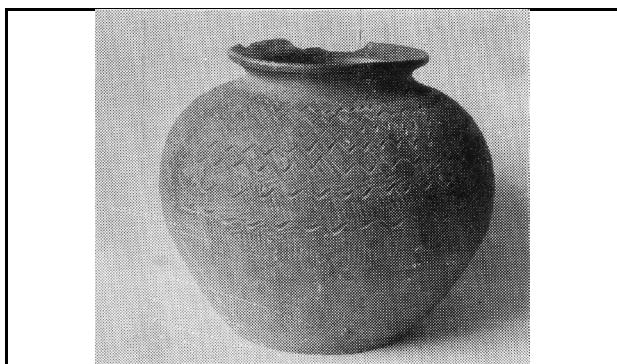
21. 志戸桶(七城)出土品②



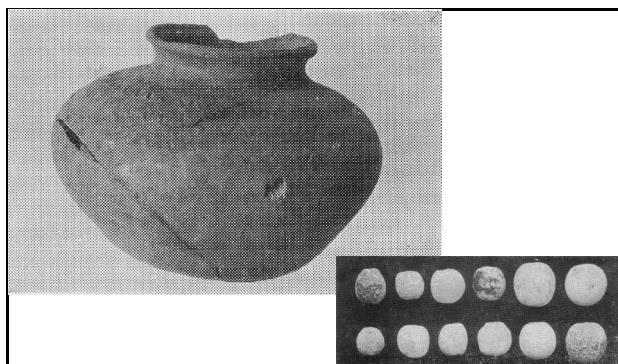
22. 志戸桶(七城)出土品③



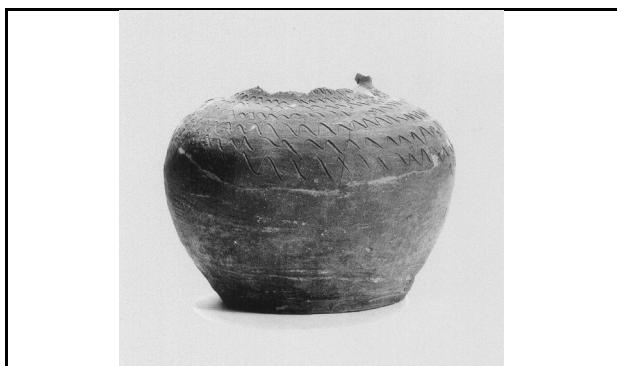
23. 志戸桶(七城)出土品④



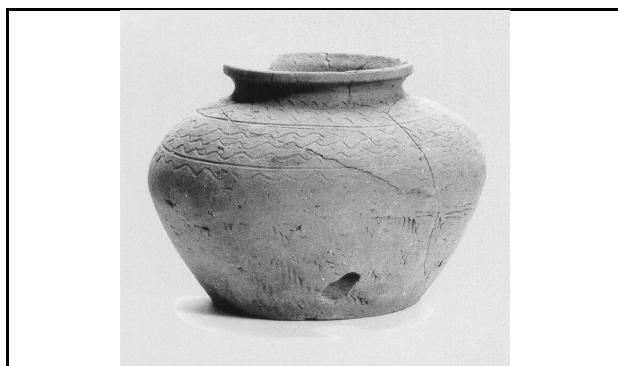
24. 志戸桶(七城)出土品⑤



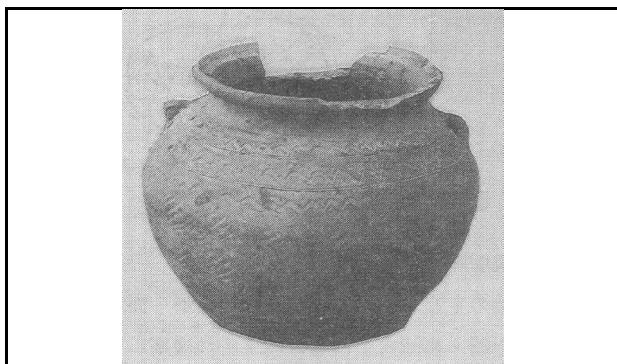
25. 志戸桶(当地)出土品



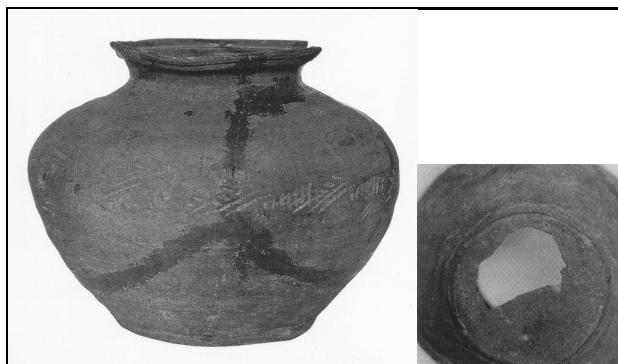
26. 山田中西遺跡(土坑墓1号)出土品



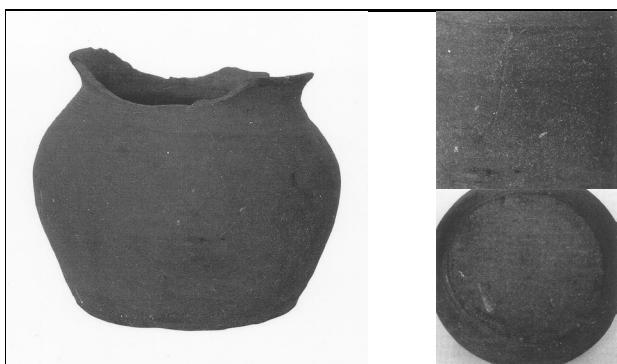
27. 山田中西遺跡(土坑墓2号)出土品



28. 川嶺集落出土品



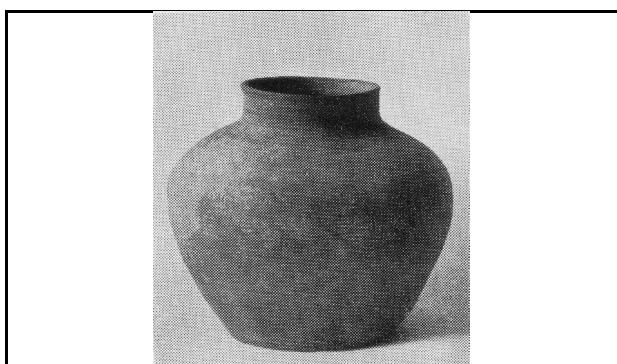
29. 羽里集落出土品



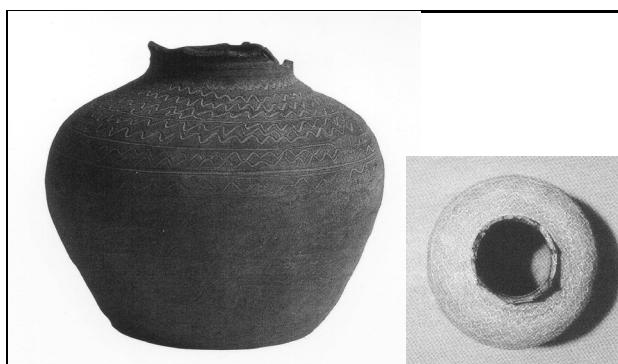
30. 喜界町出土品①



31. 喜界町出土品②



32. 西阿木名出土品



33. 井之川出土品

典 拠

挿 図

- 第 1 図 鼎 丈太郎作成
第 2 図 鼎 丈太郎作成
第 3 図 鼎 丈太郎作成
第 4 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 5 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 6 図 左・右上・右下：『赤木名グスク遺跡』「徳之島カムイヤキ古窯産製品」2003
中下：『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅱ』1990
第 7 図 『笠利町万屋城—笠利町文化財報告書 24 集一』1997
第 8 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 9 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 10 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 11 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 12 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 13 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 14 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 15 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 16 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 17 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 18 図 『城久遺跡群 山田中西遺跡 I』2006
第 19 図 『城久遺跡群 山田中西遺跡 I』2006
第 20 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 21 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 22 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 23 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 24 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973
第 25 図 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973

図 版

- 写 真 1 鼎 丈太郎撮影
写 真 2 鼎 丈太郎撮影
写 真 3 鼎 丈太郎撮影
写 真 4 鼎 丈太郎撮影
写 真 5 鼎 丈太郎撮影

写真 6 鼎 丈太郎撮影

写真 7 鼎 丈太郎撮影

写真 8 上：『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

下：『カムイヤキ古窯跡群シンポジウム』2002

写真 9 『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

写真 10 『宇宿貝塚発掘写真集No.2－主な出土遺物を中心にして－』1996

写真 11 『笠利町万屋城－笠利町文化財報告書第 24 集－』1997

写真 12 左：『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

右：『カムイヤキ古窯跡群シンポジウム』2002

写真 13 左：『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

右：『カムイヤキ古窯跡群シンポジウム』2002

写真 14 『上智アジア学第 11 号』「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」1993

写真 15 『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

写真 16 『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

写真 17 左・中上：『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

右上：『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973

右下：『カムイヤキ古窯跡群シンポジウム』2002

写真 18 『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書 II』1990

写真 19 『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

写真 20 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973

写真 21 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973

写真 22 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973

写真 23 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973

写真 24 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973

写真 25 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973

写真 26 『城久遺跡群 山田中西遺跡 I』2006

写真 27 『城久遺跡群 山田中西遺跡 I』2006

写真 28 『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書 III』1991

写真 29 『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

写真 30 『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

写真 31 『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

写真 32 『南日本文化第 6 号』「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」1973

写真 33 左：『考古資料大観 12 貝塚後期文化』「類須恵器と貝塚時代後期」2004

右：『カムイヤキ古窯跡群シンポジウム』2002